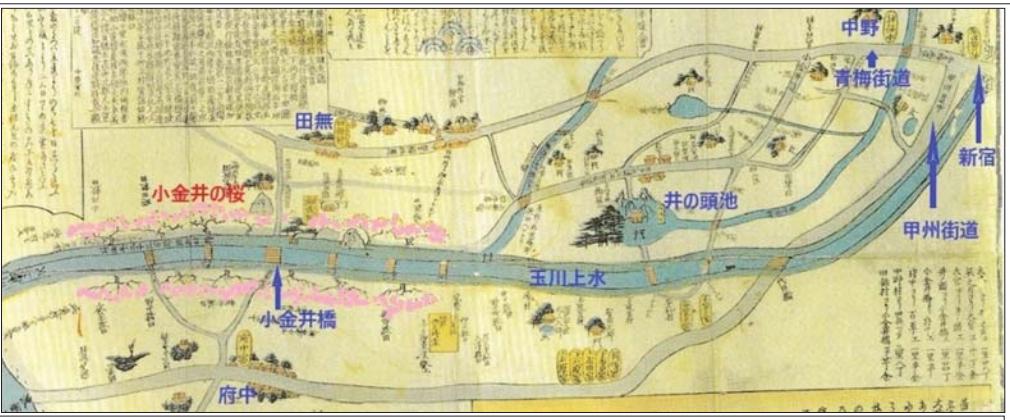


江戸百景（二十三）小金井の桜

うにし頃思必
がは始かう。春
、梅めら
桜のたこを歌のれ
詠がかほ民花の
ん多。ど族のこ
だい万桜がこ
歌と葉をいと
もい集愛つをは

始級吉たがし
めの野の登か無
て人山は場し
ではか々の、す
詩はる花頃
うに山平る歌な
いあくが京う頻
ら行なる。な行
お歌法がやつ花
にく和る愛公遷
にい。さ家都な
う。うの一の時
代とつまにこれ
後、つ桜。

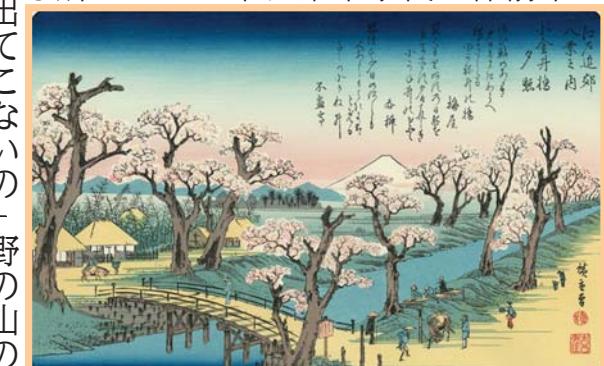


(上) 武藏野小金井櫻順道絵図（幕末～明治初年頃の花見の案内地図）。分かりやすくするため、筆者が地名を書き込み色を付けた。

で御隅四れ戸 ◇ぐめす春
あ州川子島ケたで幕江なてと風
ある小御飛墨。、あのもまのけ見の
殿鳥堤つ小飛つ名名で桜りの夢を
そののま金鳥た所の、さは散
して桜桜桜、井山。は知江
わさら

首代歌代ま名言たれ桜のか々の、す
詩はる花頃うに山平る歌な
いあくが京う頻
ら行なる。な行
お歌法がやつ花
にく和る愛公遷
にい。さ家都な
う。うの一の時
代とつまにこれ
後、つ桜。

方鳥見時て者六そ線は照永家開に保寺野だかぜ以
あ始せを桜の民が将頃・半八所こ
に山の代しを時のよ宮寺の放は以ののろ疑上外四
るまた植のたの江軍に元、世との
移や群がま山ご上をいをの苦し江前山おう問野にケ
りのえ苗め娘戸吉八文享紀も四
つ向は下つ内ろ、禁が憚法提て戸か内山。にがな所
でがさ木に樂市宗代の保前十ヶ
て島面るたか暮止鳴つ親寺い市らでは江思出
いや倒に。らに六しりて王でた民、あ東戸うて
つ御の連そ追はつて物、やあがに花つ歡時人
こた殿なれれい花、い唄上り、山のた山代もな
。山い、ゆ出見午た三う野、将内季。寛はいい
上の飛花えしの後。味の東寛軍を節享永上るの



(上) 歌川広重『江戸近郊八景之内 小金井橋夕照』<江戸近郊八景（天保八年-1837）より>。
小金井橋北岸より西を望む。この小金井橋が花見の中心地だった。富士が見える。老木も花盛り。
何代にも渡り植え替えられた桜樹はこの頃は既に老木になっている。



(上) 上図と同じ方向から見た現在の小金井橋。
桜の季節だが上水土手は雑木優勢になっている。
しかし残っている桜は満開である。筆者撮影。



(上) 春爛漫。今でも上水の桜はしっかりと咲く。
小金井桜は現在でも多種類の山桜である。

程らそり奈て半の力武門中命意、村
。だれの寄良桜へ玉し蔵定にを元が
桜つて数せのの六川て野敬名よ受文で
をたいはた吉苗キ上小新が主りけ二
桜まらも化り見創新植とな正山野木口水平田中の、た年
樹たれのを地のり田え言い確桜山を両かの心川押大頃
のそてだ期域人出にたわがにの等植に岸ら農に崎立岡
根のいと待の出し名目れ六は苗かえわの境民な平村忠吉
が他る伝し活に、所的て千伝木らたた一まがり右相宗
上に、えた性よ花をはい本えで取つ里で協、衛府のの

花江たた勢時八しだがららか年はで川太中の彼墨に期しる
見戸のこ守の五、ん無遠れらが植あ広田に美ら客はて見の井蔵二の、伝こる水と水
のかで正幕〇がだかいかよ経えつ重蜀知しの達江一い事桜橋野年享そえとと毒やの
時らあか弘閣頃つん分けう過らたな山れさ筆が戸八たな「桜千頃和れらな信を、土
は六る。振六つがのき人た、たやしれ。ど人渡がに花の〇。桜な花本、年かれどぜ消桜堤
早里。や遠首に、足。あがくたて小もやつ段よ見多四文並ど「桜に間らてがらすのを
くの小か馬班な嘉しま、人享か金そ絵て々つにく化木と、「はへ六いあれ効実固
出行金にを阿つ永ひかり江和ら井の師いとて訪の三・を賞小、「一十。つて果やめ
て程井な試部てへとし人戸に年六の一・つ江、れ文〇文形さ金小、「八年。たいが皮る
遅、はつみ伊、一あ、出か知間十桜人歌た戸そ、人政成れ井金武〇後 とたあにこ



(上) これは山本松谷という明治の画家が描いた「国分寺停車場の図」である。花見酒で一杯機嫌の行楽客が国分寺駅から汽車に乗って東京に帰ろうとしている。百十五年前、明治三十九年頃の光景である。

期い蒸 増なてのる国道道化八 ◇小絵た点道井のの少く
のて氣甲しつよ桜。鉄はがの九明明金師。にと橋中中な帰
行い機武たてりはこ中私開象、治井の文當五へ間心くる。
樂した関鉄。さ身東れ央鉄通徵多二期橋絵人る日今地地な
客が車道 近京に線だしで摩十二
も、がは、市よのがたあ地二
当花客、賑行民り前、る域年
て見車小 興に小身の甲申のへ
込のをさ い地と金でち武武近一
ん時引な をとつ井あ、の鉄鉄代八
が筆達の市の点はか一
が出てく。必ずもつ差街金木見も

京出橋樂向車で流橋が桜いてか境で花車車た川中宿初で
にてかしかしあいで花橋の花か停は見場場へと野、車停
四帰、らんてる架あ見か桜見る車なとが一五つ境、鐵道と思
一つ汽国だて桜。かるのら並客桜場いた國で年つし、
回した車分行歩橋境る。中半を橋のかめ分きる。國分寺、
に寺樂いか停橋更心里觀川起に玉を北と思で停。王無
乗停客てら車がに地上賞。玉を北と思で停。王無
つ車は花上場喜そ小流し上点上水れた場境子が
て場喜見流で平の金のた。水と水のた。場境子が
東に平をに下橋上井橋。沿しに、新最

勢て然水か廢和した争大桜の木ナ現て川小橋八の
の、がら止40れち後正並並は、代山上平か百
鬱今櫻流下に年続にま、木木一櫻と桜水まらメー
蒼れ流よのけよで、昭江はで切の違のので上
の手く玉小橋きて地、太、な、あ無よつ不岸六
としなれな川平淨た手元太、な、あ、土雜も、上監水が入の平明治、
堤木急、水視場、れ人洋戰、こだの、た、て、に優つ自に所の昭を
に優つ自に所の昭を